

研究ノート

日本語が不自由な英語圏以外の外国人 HIV 患者が診療を受ける際の困難感： 医療通訳介入に向けての定性的研究

宮越 郁子^{1,2)}, 稗田 広美^{1,2)}, 小船 雅義^{2,3)},
杉山ひかる¹⁾, 香西 慰枝^{1,2)}
札幌医科大学附属病院 ¹⁾看護部, ²⁾同 HIV センター,
³⁾札幌医科大学血液内科学

目的：英語圏以外の国籍で日本語のコミュニケーションが困難な外国人 HIV 感染症患者にとって、日本語での医療を受ける際に、マイナー言語を使用する際の通訳の確保や精度の問題、コミュニティが狭いために病状が知られてしまうリスクがある。本研究は、これらの患者が抱える困難感を明らかにすることを目的とする。

方法：札幌医科大学附属病院 HIV センターに通院する英語圏以外の外国人 HIV 患者を対象に、医療者とのコミュニケーション困難、医療通訳の利用、言語的コミュニケーションの問題に関する自記式質問紙を用いて調査した。

結果：回答者 1 名からのデータには、通訳が不在の際に「伝えたいことや質問ができない」「医療者の説明が理解できない」「家族通訳では家族に知られたくない内容が話せない」「心配させるため言いたいことが言えない」「翻訳アプリでは正確に翻訳されない」といった複数の困難があげられた。医療通訳の利用は重要な会話の際に望まれることが示され、通訳者は異なる市町村に住むことが望ましいとの意見が自由記載であった。

考察：言語の壁が治療の適切な継続を妨げることから、適切なコミュニケーション環境の整備が必要である。翻訳アプリの使用には利点と限界があり、使い分けが求められる。また、家族による通訳は家族関係に影響を与えるため、第三者による通訳が望ましい。特にマイナー言語については、地域を超えてアクセス可能なオンライン型通訳の活用が有効である。

キーワード： HIV, 医療通訳, 外国人, マイナー言語

日本エイズ学会誌 27: 39-44, 2025

序 文

日本での HIV 感染者の外国人が占める割合は 2021 年で全体のおよそ 16% となっており¹⁾、近年横ばいからやや増加傾向となっている。札幌医科大学附属病院 HIV センターにも外国人 HIV 患者が通院している。いずれも英語圏以外の国籍であり、会話は母国語または簡単な英語のみで、日本語でのコミュニケーションが困難な状況であった。そのため医療通訳を介しての診療や看護支援が望ましいと考えられたが、さまざまな理由で医療通訳の利用が難しく翻訳機器や携帯電話の翻訳アプリを使用して対応している。外国人 HIV 感染症患者の診療においては、HIV 感染症への偏見を考慮したプライバシーの配慮、セクシャリティや感染経路など、診療上必要なやりとりの中でも言葉にして聞きづらい内容があるため、通訳を利用するには医療知識が必要な上に、患者へのさまざまな配慮が必要となる。さらに、母国語が英語圏以外のマイナー言語である場合、

通訳者の確保や精度、その言語を話すコミュニティが狭いことにより、通訳を介して病状がコミュニティに知られてしまう可能性があるなどプライバシーの問題があげられている²⁾。

この研究では、札幌医科大学附属病院 HIV センターに通院する英語圏以外の外国人 HIV 患者が診療時に直面する言語の障壁とそれによる困難感に焦点を当て、看護支援の経験を振り返りながら、日本語が不自由な患者が感じる困難感を具体的に明らかにすることを目的とする。

方 法

1. 研究対象者

2023 年 3 月 29 日から 2023 年 6 月 30 日までに札幌医科大学附属病院 HIV センターに通院する英語圏以外の外国人 HIV 患者を対象とする。

2. 本研究における用語の定義

外国人：日本語でのコミュニケーションが困難な人。

診療：医療従事者が診察や治療を行う行為。

マイナー言語：母語話者や第二言語話者の人数が少ない言語。派遣通訳が可能な英語、中国語および日本語以外の

著者連絡先：宮越郁子（〒060-8543 札幌市中央区南 1 条西 16 丁目 291 札幌医科大学附属病院看護部内科外来・HIV センター）

2024 年 5 月 10 日受付；2024 年 10 月 28 日受理

言語とする。

3. データ収集方法

1) 電子カルテより患者基礎情報（年齢・性別・母国語・日常生活でのコミュニケーション方法・日本語での会話能力・日本語の理解力）、診療録・看護記録より困難感の表出が記載されている部分を使用する。

2) 先行研究³⁾を参考に自記式質問紙を作成する。内容は、診療を受ける上で医師の診察・看護師との面談など医療者とのかかわりの中で言葉が通じないことでの困難感に関すること3項目、医療通訳の利用に関すること5項目、診療上言語的コミュニケーションで気になることを自由記載での記入とした。

3) 自記式質問紙、研究協力依頼書など、研究対象者に渡すすべてのものは通訳者によって研究対象者の母国語に翻訳する。なお、この翻訳については通訳を得意とする非営利活動法人（以下NPO）に依頼する。このNPOでは一人の翻訳者の原稿を別の翻訳者が2重にチェックし翻訳の精度を担保している。

4) 受診時に質問紙と研究協力依頼書を渡し、記載終了後回収する。

5) 研究協力依頼書には、研究の目的、方法、研究への参加は自由意思であること、研究による利益・不利益、個人情報・データの管理について、質問紙の回収をもって本研究の同意を得たものとするを明記する。

4. データの分析方法

質的内容分析

質問紙の自由記載に記載された内容は、NPOの通訳者により日本語に翻訳する。

診療録、看護記録、質問紙の回答から得られた情報を、文献を用いて帰納的に分析する。

5. 倫理的配慮

本研究は、札幌医科大学附属病院看護研究倫理審査委員会の承認を得た（承認番号22-34）。研究対象者に対しては、研究の目的および方法、研究の任意性と撤回の自由、研究計画書の開示、予測される危険性、個人情報の保護、研究成果の公表、に関する事項について書面と口頭で説明し同意を得る。この説明と同意を得る際はNPOの通訳者がオンライン上で母国語による逐次通訳で対応する。研究の参加、中断、終了後の撤回は自由であり、不参加による不利益は生じることがないことを保証する。撤回する場合は、撤回書に必要事項を記載し、データ収集後1カ月までに提出することを説明する。質問紙の回答の翻訳は通訳を得意とする非営利活動法人に依頼することを説明する。個人情報の保護について、データ収集は個人が特定されないように配慮し、得られた情報は研究以外に使用しないことを説明する。分析終了後のデータはパスワードを使用して

暗号化した上で保存し、本研究で収集した情報、ならびに研究等の実施に係る重要な文書（各種申請書の控え等）は、研究の中止または研究終了後から5年、あるいは結果の公表から3年が経過した日のいずれか遅い日までの間、施設可能な場所で厳重に保管することについて説明し、同意を得る。保管期間終了後は、USBメモリ内のデータをすべて消去し、その他の紙媒体で保管した情報はシュレッダーで裁断し廃棄する。本研究は他組織からの資金源の供給がないことから、利益相反はない。

結 果

本研究対象患者3名のうち、同意を得られた1名から回答を得た。

1. 患者背景

英語圏以外の外国人患者で、母国語と英語での会話が可能であるが英語は日常生活に支障のない程度での会話で医療専門用語がある会話は困難。日本語での会話・読み書きは不可能。配偶者は英語と日本語での会話が可能であるが英語は日常生活に支障のない程度での会話で医療専門用語がある会話は困難、患者の母国語での会話・読み書きは不可能。配偶者との日常会話は英語。

2. 来院時の状況（診療録、看護記録より）

必ず配偶者同伴で、診察時は配偶者を介し英語で通訳。患者本人は「はい」「いいえ」「だいじょうぶ」程度の片言の日本語での会話があった。がん検診、拳児希望について、夫婦間での関係性などプライバシーへの配慮が必要な場面では、配偶者は同席しない状態で翻訳機器を使用し、母国語で患者本人のみと面談した。また、専門用語を使用する場面では、配偶者は同席していても翻訳機器を使用して母国語でコミュニケーションを図っていた。

3. 質問紙の回答結果（表）

診療を受ける上で言葉が通じなくて困ったことに関する質問では、【診療を受ける際に、医師の診察・看護師との面談など医療者とのかかわりの中で、言葉が通じなくて困ったことはあるか】への回答は、配偶者が同席している場面では「ない」、配偶者が同席していない場面では「ある」であった(①)。【診療を受ける際に、医師の診察・看護師との面談など医療者とのかかわりの中で、言葉が通じなくて困ったことは何か】では、10項目中9項目が選択された(②)。

医療通訳に関する質問について、【母国語の医療通訳士がいたら利用したいか】は、「はい」(③)、【費用はどれくらいであれば利用したいと思うか】では、「費用にこだわらない」(④)、【どれくらいの頻度で利用したいか】では、「大事な話があるとき」(⑤)、【母国語の医療通訳士を利用する上で心配なことは何か】では、「自分の話した内容が

表

質問内容	回答内容
① 診療上言葉が通じず困ったこと	配偶者同席時「なし」 配偶者不在時「あり」
② 困った内容	a. 自分の言いたいことが伝えられなくて困った b. 自分の聞きたいことが聞けなくて困った c. 検査の内容がわからず困った d. 検査を受けるとき言葉が通じず説明されていることが分からなくて困った e. 看護師の話（説明）がわからず困った f. 医師の話（説明）がわからず困った g. 家族に通訳してもらうことで、家族に知られたくないことがあり、すべてを話せず困った h. 家族に通訳してもらうことで、家族に心配させるため言いたいことが言えず困った i. 翻訳アプリだと正しく訳されず話が通じなくて困った
医療通訳利用にあたって	
③ 希望	あり
④ 費用	費用にこだわらない
⑤ 頻度	大事な話があるとき
⑥ 不安内容	自分の話した内容が外部に漏れること
⑦ その他：コミュニケーションで気になること（自由記載）	・言葉のコミュニケーションがあまりとれない ・説明を十分に理解できない ・通訳者は患者と違う市町村に住んでいることが望ましい

外部に漏れること」(⑥)であった。

自由記載の【その他：診療を受ける際に、医師・看護師との面談など医療者とのかわりの中で、言語的コミュニケーションで何か気になることはあるか】では、「言葉のコミュニケーションがあまりとれない」「説明を十分に理解できない」「通訳は患者と違う市町村に住んでいることのほうが望ましい」(⑦)との回答が得られた。また、質問紙への回答を得る際に、患者から「この人（オンライン型通訳の通訳者）は、どこに住んでいるか」との質問があった。違う都道府県であることを伝えると「それなら大丈夫。ここ（現在の居住地区）の〇〇人のことはほとんど知ってる。〇〇人と□□人と△△人はおしゃべりだから。」「(通訳の)勉強しててもおしゃべりな人いる。そういう人知ってる。」との言葉が聞かれた。

考 察

診療を受ける上で言葉が通じなくて困ったことに関する質問①②の回答から、本研究では当初、複数の事例を用いて帰納的分析を行う予定であった。しかし、症例が1例にとどまったため、帰納的分析は困難であり、質的な検討にとどまった。この限界を踏まえつつも、配偶者がいない場面においては、患者が言いたいことや聞きたいことを十分に伝えられておらず、診療を受ける上で言葉が通じないことにより困っていることが多い結果となった。外国人診療に関する先行研究³⁻⁷⁾からも、外国人患者が医療機関を受診する際に、言葉が通じないことによる多くの不安や困難感を感じていることが明らかとなっており、その影響として言葉が通じない問題への対応策として「受診を控える」という行動へ繋がるという結果が報告されている。HIV診療において最も重要なことの1つとして、患者が

生涯途切れることなく治療薬を飲み続けられるよう支援していく役割があり、確実な治療薬の内服のためには定期的な受診が必須である。また、「検査の内容がわからず困った」「検査を受けるとき言葉が通じず困った」「医師・看護師の話（説明）がわからず困った」との回答から、医療者側の話しや説明について患者に十分な理解が得られていなかった可能性があった。永田ら⁸⁾は、「『医師の説明が理解できないこと』『日本語が話せないため医師に十分な情報提供ができないこと』『薬の効果や副作用がわからないこと』は、患者が医師の指示を理解しないまま治療を行うことや、症状が明らかにされないまま診断や治療が行われることになり、患者にとってたいへん危険性が高い。さらに、このことは患者だけではなく医療者側にも影響を及ぼす」と述べている。これらのことから、安全な医療を継続して提供するためには適切なコミュニケーションがとれるような環境整備が課題である。

翻訳アプリに関する質問の回答では「正しく翻訳されななことで困った」との結果となった。翻訳機器や携帯電話の翻訳アプリを使用して面談を行った際に、お互いに一度で話の内容が通じないことが何度かあり、医療者側としても、正確に翻訳されているのか確認ができないことで不安が残った。このように翻訳アプリは誤訳の判別をすることが困難であり医療提供の場面においてコミュニケーションエラーの原因となる場合がある。しかし、野村ら⁹⁾は「翻訳機は医療通訳と比較して手配する手間やコスト削減ができ、利便性が高いツールである。また多言語に対応可能であり24時間365日患者への対応も可能である」「シンプルで定常的な会話場面においては医療通訳者の人材不足の緩和や負担を軽減するメリットもあげることができる」と述べている。本研究においても、長文を短い言葉や単語に言い換えることで「わかった」「わからない」などの片言の日本語で返答し通じることもあった。これらのことから、高度で複雑な会話は通訳者の利用が望まれるが、コスト面、多言語への対応が可能なこと、患者の急な来院などへの対応には翻訳アプリや翻訳機器を使用するなど、利点と限界を踏まえ、使い分けて活用することが望ましい。

家族が通訳する場面に関しては、「家族に知らせたくないことがありすべてを話せず困った」「家族に通訳してもらうことで家族に心配させるため言いたいことが言えず困った」、医療通訳の利用に関して「大事な話をするとき利用したい」との回答があり、家族に知られたいくないことや、家族に心配をさせるため言いたいことが言えないという思いから、困難感を感じていることが明らかとなった。特にHIV感染症については他の疾患に比べ、感染経路や拳児希望など、家族にも話づらい情報を収集しなければならない場面が多くあり、家族関係に大きく影響を与

える可能性がある。宇野ら¹⁰⁾は、「家族友人が通訳についての場合、外部の通訳がついた場合以上に、問題が生じているケースが多かった。(中略)特にHIV感染症においては、患者のプライバシーへの配慮、告知の際の微妙な心のケアを含めて、通訳は専門の第三者でないと不可能なことが多い」と報告している。さらに、永田ら⁸⁾は、「家族や友人など患者の近親者がにわか通訳となるケースでは、医療専門知識の不足による正確な通訳が行われない危険性に加えて、患者とにわか通訳者との密接な関係に関連して患者が真の情報を提供しない可能性もある」と述べている。今回の研究結果からは家族が医療者の言葉を通訳することに関して患者が問題を感じているとの回答はなかったが、医療者側としては、実際の診療場面において家族が医療者の言葉を正確に患者に伝えられているか確認する術はなく、真の情報が提供されていないのではないかと不安があった。また、医療通訳の利用に関して「大事な話をするとき利用したい」との回答が得られており、状況に応じて家族以外の通訳を望んでいることがわかった。これらのことから、患者が受診する際に医療通訳を利用するという選択肢があれば、より患者の気持ちに寄り添った形で真の情報を引き出すことができ、看護支援を行うことができた可能性がある。

医療通訳の利用に関するもう1つの結果として、患者は大事な話が通訳を介して外部に漏れるのではないかと不安をもっていることがわかった。質問紙の自由記載欄の回答と患者の言葉から、英語圏以外のマイナー言語を母国語とする日本在住外国人のコミュニティは狭く、情報が漏れやすい状況であること、そのため、診療を受ける際に言葉が通じなくて困っていることがあっても、医療通訳を利用することに抵抗を感じていた。本研究でも居住地域以外に住んでいる通訳者を希望されており、母国語圏のコミュニティへ情報が漏れることへの不安が強かった。明石ら²⁾は、母国語が英語圏以外のマイナー言語である場合、通訳者の確保や精度、その言語を話すコミュニティが狭いことにより、通訳を介して病状がコミュニティに知られてしまう可能性があるなどプライバシーの問題があげられている。特にHIV感染症は、感染経路、セクシャリティ等への配慮、社会的スティグマを伴う疾患でもありプライバシーの保護はよりいっそう重要な問題である。

また、英語圏以外のマイナー言語は通訳者の確保も課題となっている。札幌医科大学附属病院が所在する地域においても英語・中国語の派遣通訳は可能であったが、それ以外の言語においては派遣通訳の登録者自体が少なく確保することが困難であった。今回の事例のように居住地域から離れた場所の通訳者を希望されたことから、必ずしも派遣通訳がベストな方法とはかぎらず、特にマイナー言語に

関しては、居住地以外の地域から手軽に通訳の確保ができるオンライン型通訳などが有用であると考えられる。

札幌医科大学附属病院 HIV センターでは、現在医療通訳を利用する環境が整っていないため、翻訳機器の利用や、家族や友人、ボランティアなど医療通訳の訓練を受けていないアドホック通訳に頼らざるを得ない現状となっている。しかし、本研究結果により、日本語が不自由な外国人 HIV 患者の診療上では、患者・医療者ともに意思の疎通が図られているか確認できない状態で治療や看護支援を進めていくことの危険性や患者のプライバシーが十分に保護されていないことが示唆された。今後増加することが予測される外国人 HIV 患者のプライバシーを守り、安心・安全な医療を提供していくためには、場面やニーズに合わせて医療通訳者の介入や翻訳機器の使用を選択できる環境を整えていく必要がある。本研究の限界として、以下の点あげられる。本研究で同意を得られた研究参加者は1名であり、国籍も限られていた。このため、当初予定していた帰納的分析を症例数の不足により行うことができなかった。また、日常会話程度の通訳ができる家族もいたため、単身者や単独で来院する外国人 HIV 患者の場合とは結果が異なることが予測される。この1事例のみで、外国人 HIV 患者の診療を受ける上での困難感について一般化するには限界がある。一般化するためには、多施設との共同研究である程度多くの患者の声を集めた定量研究が望ましい。今後、外国人 HIV 患者への医療通訳利用に向けた体制を検討していく際には、さらなる調査が必要となる。

結 論

診療を受ける上で、通訳を担っている配偶者が不在の際には、言葉が通じないことで「正しく伝わらないこと」、配偶者が同伴の際には「家族が通訳であることで言いたいことがいえぬこと」に困難感を感じていた。また、医療通訳の利用に関して、患者の母国語がマイナー言語の場合は、コミュニティが狭くプライバシーが守られないため、通訳者は患者と違う市町村に住んでいることを希望していることがわかった。

謝辞

本研究を進めるにあたって協力していただいた HIV セ

ンター構成員および看護部の皆様、異動された旧構成員である池田博医師に感謝の意を表します。

利益相反：この論文にかんする利益相反はない。

文 献

- 1) 厚生労働省 エイズ動向委員会：令和3（2021）年エイズ発生動向年報（1月1日～12月31日）. <https://api-net.jfap.or.jp/status/japan/nenpo.html>（2022年12月10日閲覧）
- 2) 明石雅子, 杉浦康夫：マイナー言語に対する医療通訳の課題. *J Intern Soc Clin Med* 4: 22-26, 2021.
- 3) 別府佳代子, 木内恵, 萬弘子, 小山内泰代：救急搬送され緊急入院となった外国人患者が抱える困難. *日本渡航医学会誌* 14: 6-11, 2020.
- 4) 橋本秀実, 伊藤薫, 山路由実子, 佐々木由香, 村嶋正幸, 柳澤理子：在日外国人女性の日本での妊娠・出産・育児の困難とそれを乗り越える方略. *J Intern Health* 26: 281-293, 2011.
- 5) 堀本知春, 上杉裕子：在留ベトナム人技能実習生の医療受診における困難. *J Intern Health* 37: 1-9, 2022.
- 6) 山岸祥子, 佐久間夕美子, 宮内清子, 松本彩子, 堀川沙織, 渋谷優, 青木早織, 佐藤千史：外国人旅行者の我が国の医療体制に対する不安要因. *J Intern Health* 23: 273-279, 2008.
- 7) 林麻衣子, 森淑江：外国人妊婦の外来診療に対するニーズ調査. *群馬保健学紀要* 23: 101-108: 2002.
- 8) 永田文子, 濱井妙子, 菅田勝也：在日ブラジル人が医療サービスを利用する時のにわか通訳者に関する課題. *J Intern Health* 25: 161-169, 2010.
- 9) 野村楊子, 亀井哲也, 重野亜久里：ロールプレイを用いた多言語音声翻訳機と医療者の通訳の質評価に関する研究. *J Intern Soc Clin Med* 4: 38-42, 2021.
- 10) 宇野賀津子, 高木陽一, 内海眞, 沢田貴志, 岩木エリーザ, 吉崎和幸：日本における、在日外国人 HIV 感染者の医療状況と問題点. *日本エイズ学会誌* 3: 72-80, 2001.

Difficulties Encountered by Foreign HIV Patients with Limited English Proficiency in Receiving Medical Care due to Japanese Language Barriers: A Qualitative Study towards Medical Interpreter Intervention

Ikuko MIYAKOSHI^{1,2)}, Hiromi HIEDA^{1,2)}, Masayoshi KOBUNE^{2,3)},
Hikaru SUGIYAMA¹⁾ and Yasue KOUZAI^{1,2)}

¹⁾ Department of Nursing, and ²⁾ HIV Center, Sapporo Medical University Hospital,

³⁾ Department of Hematology, Sapporo Medical University School of Medicine

Objective : For foreign HIV patients with limited English proficiency, there are challenges in securing interpreters and ensuring accuracy when using non-English languages, as well as risks of their medical condition becoming known within a tight-knit community. This study aims to uncover the difficulties these patients face.

Methods : A self-administered questionnaire survey was conducted among non-English-speaking foreign HIV patients attending the HIV Center at Sapporo Medical University Hospital. The survey focused on difficulties in communication with healthcare providers, the use of medical interpreters, and issues related to linguistic communication.

Results : Data from one respondent highlighted multiple challenges when interpreters were absent, including inability to convey desires or ask questions, difficulty understanding medical explanations, inability to discuss private matters through family interpreters, reluctance to speak due to worrying family, and inaccuracies in translation apps. The findings suggested that the use of medical interpreters is preferred during important conversations, and interpreters living in different towns are desirable.

Discussion : Language barriers can hinder the continuation of proper treatment, necessitating an environment that facilitates appropriate communication. The use of translation apps has benefits and limitations, requiring careful selection. Family interpreters can affect family dynamics; therefore, third-party interpreters are recommended. Particularly for minor languages, utilizing online interpreters accessible beyond local regions is effective.

Key words : HIV, medical interpretation, foreigners, minority languages